

明治四十二年 紀元二千五百六十九年

本紙 一枚二錢 一ヶ月六錢 三ヶ月九錢 六ヶ月十二錢 一年十八錢

定價 金銀 郵費 一ヶ月十三錢

大祭日及び日曜日とは休刊(日刊)

廣津 五十五號活字十七字路一行一回金  
料金 五十錢 雜報特別廣告五錢  
料金 五十錢 一行銀十錢

發行兼編輯人 高木久馬 太郎  
印刷 京都西門小門通電話六六三  
發行所 京城新報社

▲病者到處有華嚴

小倉主計監の談

塵立道路の付更へ其他諸般の

今村警視の談

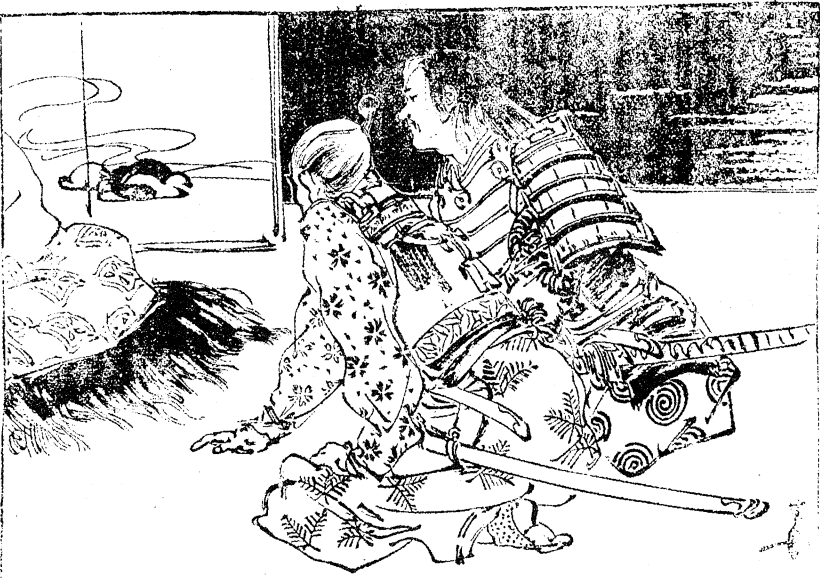
▲人氣 北韓は人氣不良なりと聞き居しも予が通過したる地方は至て靜穩にして日本人に親近せるが如かりき。去れど唯鏡城を東南に距る十二里水南と呼べるは戸數約三千戸を有する小都落なるが宗教の關係より日本人を嫌忌し會て日本調査出張にて危害を被り裁許所より吏員を出張せしめて大檢査を行へる事あり由にて予が調査用ありて同地方に出張するにあり同所に宿泊せざるやう一韓人は予に注意を與へたり總じて北韓の人民は南韓のるれに比し精悍にして富の度も高きが如し其住屋を見るも南韓には幾多も北韓には殆んど瓦葺なり但當食は多く粟若くは稗を以て之に充てたる米の用は極めて少なし隨つて稻田ばかりで、輸出頗る多し目下秋收を終へ市場一般に賑へり又氣候は北韓の寒氣少し強し當地とは襖衣一枚の差あらん云々

△白丁の社會上の地位  
△白丁の社會上の地位を説明するに先立つて一應普通民の階級を述べねばならざる、恰當高麗朝の尤隆盛を極めて居るときは社會上の地位から之を觀たのではなく、個々の職業上賤しい生業と目されて居るに過ぎぬ。皮工、僧侶、娼婦、釋人、僧人、奴隸の如きを八賤と云るので、矢張り常民に相違はない。白丁は随分賤い待遇を受けたものだ、昔は次號に許さず彼等の一大幅をも見るべき議政府令が開國五百三年、議政府令と云ふのが布かれて賤を免免したる事で、八賤は八賤に非ずと法文で證明されたから、八賤の肩身は大いに廣くなつた體だが、白丁は矢張り白丁で檢置かれた次號に彼等が社會から受けた慘酷な待遇を書かう續く

●新刊 紹介  
●家庭教育 實際 秀蘭女史著 眞は小供を愛する者は愚直なり愛國者なり而して又た最もよく人生の目的を發見し得る者なり何となくば又た眞に眞に愛する小供の教育の良否は體て國家の立派に關するを以てなり我國の東洋一の強國として世界の文明國に伍するを得たるも有力なる原因は小供を受するたの至て致さるに由りたれば、眞に眞に供を受することに難きだき、似て眞に易かも易からず世上往々に其の愛か過る小供を受するに其だ以て痛癢事す其に小供を受するに其はよく教育を授けるに難き言ふも從來幾多之に關する書類の世に行はるに幾多の大概抽象議論多し又た大概小供に直接する

第三十二席

第三十二席



せし勇も妻も事情を知ずして殊の外に  
 猛り忽ち捕虜となつて生贖を賜ふ事  
 なれども知らんも知れず。若し然る時は無  
 下口惜しき限りなり。兎に角汝は馳  
 歸へり。忠國に力らを發せ脱べくは  
 通るべし。若しかなはずは忠國白縫諸  
 共に討死致しべし。我が生前の心掛り  
 是れのみなりと。論じ給へば紀平治  
 承諾して。紀然らば仰せに隨  
 やうく。誓つて。府に馳せ下つて目撃し  
 がひ奉つて。宰府に馳せ下つて目撃し  
 合戦仕り。若し叶はざる時は忠國殿白  
 縫の御供して便宜の地に潜はせま  
 らせ。時を待ち再び見へ奉つらん。君  
 にもよく艱苦を忍び生命を保たせ給は  
 ん事こそ願はしう存じまする。……

はされました。然るに太宰府は遙  
 距たり居りますゆゑ、洛に合戦の  
 事は未だ聞へず。忠國白縫は元  
 士辛苦な斯るべしと思ひも寄ら  
 年より只御曹司の歸らせ給ふを今  
 翌日かと待つ保元元年七月廿六日  
 平俄かに物騒がしく聞へますゆゑ  
 國は怪しみ獨り臥房を出て遠侍ま  
 かんてせし時、家持吉田兵衛高間  
 近々しく馳せ参りました。忠、彼  
 昔は何事ぞ。兩人。然れば實事やら  
 には鳥羽法皇崩御の折しも新院御  
 の事ありて去る十一日の朝まだし  
 合戦始まり。其日の中に新院方は  
 け給ひしとぞ。然るに下野守殿は



城京

廣江商會

電話五七六

諸官衙納入多數御入用の節は拙者所有の山林に於て製造仕候間特に勉強致候條多少に不拘御用命被下度願上候

京橋南大門外御成町(電話五八七)

木炭 堅薪 松炭 松薪 賣販 卸

陸軍諸官衙御用達薪炭問屋

南商會

同南川出張所 同龍山出張所

株式會社

# 第一銀行電話番號

營業用 番	營業用 番	客用 番	臨時建築 番	支配庫部 番	國庫部、 發行部用 番
六〇	三三	六〇	三三	三三	三三
長	長	長	長	長	長

總支店

京城支店

寫眞器

機破格廉  
販賣商  
錦郵券四  
にて送呈

味の素 和洋料理は勿論  
一般的の家庭料として日常  
欠可らずの味品なりて節  
敷も入らず色々々面倒な手  
数も用ひ得るなりて調法及  
經濟的調味品でありまして  
定價 一瓶 三十五錢  
他地方片引換小包にて送  
ります

京國特約店  
東京 城江  
電話 二四八番

星

今般拙者有名なるソングホ  
 テルの跡を引き受け改良に改  
 良を加へ精々勉強仕候宴會其  
 池の準備も整へ居り料理も御  
 望に依りては主極廉價を以て  
 調進可仕候何卒御遊勞々御高  
 來の程切に奉願上候  
 京 城 堀 洞  
 ソングホテル  
 主人 ジ、ボエル  
 電話七三九

擴張廣告  
 中村 再造  
 和田 常市  
 林田 茂七郎  
 三浦 彌五郎

東京外神田旅籠町(電車通)  
 會社 東京寫眞館  
 電話下谷八六五

へ召れ、御官職入邸敷を、始め六人の子息を  
を勝れ給ひ、院の御方方に参られまし  
た、軍敗ては、父子兄弟みな四落ハ  
落に成らせ給ひ、其の御生死の程さへ  
知れずなりました。

廣 告

昨十一月十七日と申し開日午後三時  
より京成電鉄官民有志秋期  
ラに於て、大親睦會相俵度會費御仲間を  
大親睦會 諸君は會費銀二圓を  
城居留民團役所へ御申込火曜 正午迄京  
都近郊市内各料理店より、花車を  
曳廻しはし會場に於て、余興手踊可致  
幸に候

明治四十二年十一月十二日







